て考えようとしている。十二月に入ると子ども同志の話し合いを通して簡単な解釈をつけるようになり、さらに探究的になるので子ども達同志での話し合いを通してより深いことにまで疑問をもつような指導が肝要だと思う。

年長組の三年保育児と二年保育児を比較すると、二年目児がお日様がたくさんでないから温度が低いと判断したり、雷が電気であることをつきとめて満足する等の想像的な段階を抜けきっていない良さがある。三年目児は雷は電気だけど、どうして音がするのとふしぎがる、喧嘩の処理も友達の考えを受入れて、自分達で解決しようとするなど、科学的な観察力や協力心、判断力も子ども達同志の交流の中で社会性と共に高まっていくことがはっきり示される。自分の生活に結びつけて解決しようとする時期、つまり四、五才の幼稚園での過し方が物事の考え方、処理の仕方を身につけてゆく上に影響が大きく、従って教材の与え方、環境構成の仕方、多くの見学、観察などの新しい経験をさせることが主要になって来るように思う。

生活発表の欄で考慮すべきだと思われた点は発表の形式である。三才の最初は勿論この型式は無理なので教師が話を聞いてやることが第一、友達の話題にヒントを得て話したがる頃から十名前後が円陣になって話し合いをする。三学期には小人数での生活発表やギニヨール遊びにも無理を感じなくなる。四才では人の前で話したくて我慢できない傾向にあるから話し合いの型式をとったり話題を与える。皆の前で発言する機会を作ることも工夫してよく、三学期になれば大勢へ話そうとする気持も出て、良く聞けるようになるから時期をあせらず待つことを考慮する必要があると思う。また、五才児組になると一組三十名以上になっても生活発表の型式をとることにさほどの無理がなくなるようだ。お話の聞き方にも進歩がみられ二、三日前にした話の続きをせがむ、筋のおもしろさより内容を理解して話の感想を述べるとか、その話材が他の遊びに展開するので、静かにきく事だけを主眼にせず感情の表現、内容の把握をより大切に扱う時期のあることを知っておくべきである。このように幼児はグループの中でめざましい変化をとげているわけだから、各年令における成長の過程を良く知った上で無理のない計画を作成し、なお一層高まり合える保育材、或いは保育技術をも含めてより適切な保育環境を設定する必要をあらためて感じたわけである。

（大会発表論文抄録15頁）

保育と発達

（二報—幼児期の話合いの方法とたしかめ）

保育問題研究会　天野　章

私どもは、おしゃべりな子、無口な子が参加している集団保育のなかで、それぞれの子どもが、ことばと行動とをむすびつけ、考え方を伸すには、どんな保育方法がよいか、その方法と子どもの効果はどうか、この点を共同研究の形でしらべてみた。

研究のなかみ　保育と発達の二つに分れる。

一つは、話合いという保育方法が、現状の保育実践のなかで、どのようにあらわれているか、ということをみた。（要約）

1、話合いの形をとりながら、保育者の説明に終っている方法。

2、子どもたちの話合いに保育者が参加しながら課題を拡げ、子どもたちに理解させようとする方法。

私どもは、1と2の方法を比較しながら、主として、2の方法に

ついて、さらに記録を資料にして、指導過程を分析し、次の二つの指導のちがいを発見した。

イ、子どもたちと話合いをしているが、保育者の意図に近い子どもの意見を保育者自身がまとめていく。ロ、話合い過程で、子どもたちの意見をひきだし、それによってまとめていく。

私どもは、このイとロの指導過程のちがいは、子どもたちの生活を大事にし、その生活と課題を充分にむすびつけて話合う指導(ロ)とそうでない指導のちがい、しかも、子どものなかみを大切にするのと、教える内容を大切にするちがいというふうに考えている。

いま一つは、以上の保育の方法と子どものあらわれをみた。

話合いのテーマは、生活の約束と約束を破った場合の話合い。あらわれとして——

a、保育1では、子どもたちの肯定は早い。しかし、約束を破った場合の子どもの意見では、保育者の意見がオーム返しにでてきている。b、保育2におけるイでは、子どもたちの生活に基づく意見がみられる。(具体的場面で見たり聞いたりしたこと)が告白、つげ口的発言が多く、問題の結論になるとオーム返し的なまとめになりがち。c、ロについては、約束についての問題状況、場面、それについての子どもなりの意見。(これはおとなにとって突飛でおもしろい意見)がみられた。

結果　私ども保育を考える者は、子どもがたんに肯定するだけでなく、それが体験化することを願っている。そして、生活指導の話合いでは、子どもの生活のなかでの意見や行動を充分に取り上げて話合いを拡げ、まとめていくことが大切であるといえよう。

なお、他の保育内容、指導過程を検討しながら、問題点をはっきりさせたいと考えている。

(大会発表論文抄録72頁)

幼児の言語指導についての一考察

大阪樟蔭女子大学付属幼稚園
田中千鶴子・泉　加津子
石橋　和子・斎藤富美子

日常の保育をしながら幼児の言語生活を観察していくと、いろいろな点で疑問が起ってくる。よくしゃべる子どもと、殆んど口をつぐんで、こちらの問いかけに対してだけ僅かに必要最少限度のことばだけを話すもの、或いは唯だまって首を縦や横にふるだけのものなど、果してどれ位の語いをもち、どれほどの発音の誤りがあるであろうか、その実態をつかむ必要がある。また一日の保育で保育者が話すことばは数知れない程あるがそれらを幼児はどのように受けとり、どのように理解しているのであろうか。例えば幼児の大好きな童話は、どんな形で理解され記憶されているのであろうか。同時にこの活動の基礎となるものとして考えられる生活経験発表という活動は、幼児が保育者や友だちに、自分の経験したこと知っていることを話したくてならないという気持を巧く指導し、方向づけして、発表能力が増すように仕向けていく方法だ。幼児に多勢の前でも話せる習慣をもたせ、自信を育てることと、相手に解ることばで自分のいい分を発表することを、幼稚園などの親しみ易い雰囲気の中で、経験させることは、幼児の言語指導上大切なことといえよう。

以上のような意図のもとに調査した結果は、次の通りであった。

1、語いと発音の問題を3才児において調査した結果、発音の乱れ